

研究・調査報告書

報告書番号	担当
145	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Early adolescent cognitions as predictors of heavy alcohol use in high school. 思春期早期の飲酒認識度は高校での大量飲酒を予測するか	
執筆者	
Andrews JA, Hampson S, Peterson M.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Addict Behav. 2011 May;36(5):448-55.	
キーワード	
認識度; 大量飲酒; 思春期; 予測因子	
要 旨 中学時代に評価した飲酒に関する認識度が、高校時代（14 から 18 歳時）における大量飲酒を予測し得るかを検討した。 オレゴン州青少年薬物使用プロジェクトの参加者 1011 名のデータを用いて潜在成長モデルにより構造化モデルを作成した。 このモデルでは、7 年生時の飲酒に関する社会的イメージと記述的規範が、8 年生時の飲酒の意欲に関連していた。これらの要因は、高校時代（9～12 年生時）後の、大量飲酒に関する切片と傾きに関連していた。対象者全体では、記述的規範と社会的イメージは、飲酒意欲への影響を通じ、ともに多量飲酒（9 年生時における）の切片に影響を与えていた。多重サンプル分析の結果では、女子でのみ、社会的イメージが大量飲酒の切片に関連していた。 これらの結果より、中学時代の飲酒に関する認識度が高校時代の飲酒を予測し得ることが示唆された。こうした知見は、社会的イメージの変容をターゲットとした、中学時代からの飲酒予防プログラムにより、飲酒に関する正しい認識を促していくことの必要性を強く示すものである。	